校長室だより～燦燦～ №６１７

# 三泣き

2022.9.5

会津の学校に勤務したことが二度ある。いずれも単身赴任である。一度目のときに、ある言葉を知った。「会津の三泣き」である。これは会津の人たちの気風を表す言葉である。諸説あるようだが、一般的には下のように解釈されている。

一泣き　初めて会津に赴任した人は、よそ者に対する会津人のとっつきにくさにまず一泣きする。
二泣き　やがて会津での生活に慣れてくると、温かな心と人情に触れて二泣きする。
三泣き　そして会津を去るときには、情けの深さに心を打たれ、離れがたくて三度目の涙を流す。

もちろん会津に住んでいるすべての人に当てはまるというわけではない。時代とともに変化してきている面もある。だが、会津人と呼べるような会津の方の心を感じることがある。

仕事の関係で、今年は会津の先生方のお世話になることが多い。二度ほど会津の学校に勤務したおかげで知り合いの先生方もいらっしゃる。これが心強い。仕事がスムーズにいく。県内各地の先生方とやりとりをしながら仕事を進めているのだが、どうも会津は違うように感じる。それは一言でいえば心意気のようなものである。

会津人や会津の心意気と表現しても違和感はない。では、福島人、福島の心意気はどうだろう。郡山人、郡山の心意気ではどうだろうか。まるでしっくりこない。そもそも誰もこのような使い方はしていないだろう。

福島、郡山では成立しないが会津だと成立するのである。会津の歴史と風土が人を創ってきている。時代は変われども、会津の地に脈々と受け継がれてきたものがあるにちがいない。それは、心なのではなかろうか。心は、そう簡単には変わるものではない。

私の場合はというと、一泣きめを覚悟して南会津の地に赴いたのだが、とっつきにくさや厳しさなど感じることはなかった。とてもよくしていただいた。したがって、二泣きめもない。最初から温かな心と人情に触れることができた。あくまでも、一泣きがあっての二泣きである。私の場合は、一泣きめがなく、二泣きもなく終わった。

こうなると、三泣きめはどうなるのか。一度目も二度目も私は同じことを思った。「この学校が福島にあればいいのに」もちろん、現実には無理な話である。離れがたかったことは事実である。だが、三泣きめもしていない。自分は福島に帰る人だった。それでも、会津の方々はよくしてくれた。泣いてはいないが、私の中にはずっと会津の心が残っている。そんな気がしている。だから、会津のためならば、がんばろうと思う。それが恩返しである。